思考の隅景

連載263

渡辺俊夫さんのこと

日英文化交渉に寄与した学者を追慕する

Toshio Watanabe in memoriam
10 Aug. 1945 - 27 July 2025

稲賀繁美
国際日本文化研究センター／総合研究大学院大学・名誉教授

渡辺俊夫さんが英国から帰国中のこの夏、家族旅行中、北海道で急逝された。その半年前に明治美術学会の創立40周年の基調講演をなさったばかり。懇親会では隣席で常ながらの歓談を交わしたばかりのことだった。

初めてお目にかかったのは、同じ学会旗揚げ初期の国際シンポジウム(1988)。渡辺さんは日本に洋風建築を移入したジョサイア・コンダーの周辺を論じた。ロジャ・スミスやウィリアム・バージェスらの東洋建築観・熱帯湿潤の風土との調和に関する彼らの思想に覗く帝国主義的発想、その底流をなすゴシック復興の中世主義が検討された。

1992年には、前年にロンドンで開催された画期的な展覧会の日本語版、『Japanと英吉利西：日英美術の交流1850―1930』展が世田谷美術館に巡回した。1997年には『自然の美・生活の美――ジョン・ラスキンと近代日本』展が巡回する。これらの刊行物は今日なお凌駕できない基本文献として残るが、その基礎には初期の労作Toshio Watanabe, *High Victorian Japonisme* (1991)がある。これらの準備で東京に借りた借家は、神保町で探した書籍や資料の山で埋まった、と伺った。

その後世界各地の国際学会などで同席する機会を得た。ダイアナ妃の事故死の葬儀で開会が半日延期された、イースト・アングリア大学主催の「日本美術の巨匠と名作」に、招聘でなく応募で参加したのは俊夫さんと当方のふたりだけ。南半球で初めてのメルボルンでの国際美術史学会では、世界各地の日本庭園踏査を進める俊夫さんに同行して植物園を廻った。

その間、北米の日本美術研究者Japan Art History Forumでは会長を務められ、その会場となるＡＡＳ（アジア研究学会）年次会では何度か渡辺教授主催のセッションの討論者も仰せつかった。モスクワでの「東洋主義・西洋主義」の討論会(2010)、金沢美術工芸大学での美術概念の検討会や福岡アジア美術館の国際シンポ、サン・ディエゴでの近代日中美術交流の会議（2018）など、同席して発表を競った国際会議は枚挙に暇がない。

渡辺さんの本拠ロンドンでも現代陶藝や通称TrAINと呼ばれた国境横断藝術・国籍・自己同一性研究企画にも何度か講演のお招きに預かり、英国の同僚や藝術家と交わった。東京滞在中には放送大学の番組収録への出演を快諾して頂き、造形上の文化翻訳問題を論じて頂いた。

父上は音楽美学の大家でラジオの音楽放送でも著名だった渡辺護、ドイツ人の母上は織物デザイナーとしても人気を博した方。スイス・ベルン生まれの俊夫には、日本の戸籍登録がない。ハーフとしての自覚については伝記的な談話が*Bridges, Anglo-Japanese Cultural Pioneers 1945-2015*で読める。上智大学出身だが、日本人離れした端正な容姿と明晰な英語表現、それに豊富なネクタイの上品な品揃え、気さくで偉ぶらない温和な人柄は国籍を問わず多くの信頼を集めた。

最後の機会となった明治美術学会の早稲田大学講演会では、藝術上の規範について議論が起こった。脱欧米中心主義が要請される風潮のなか、反欧米の訴えは国粋的反動をも誘発する。また社会的不利益者の権利擁護の立場からは藝術上の価値規範そのものの撤廃を訴える主張がなされる。

これを受け、渡辺さんは価値多様性の育成には、使用者責任と製造物責任との両立が不可欠と指摘した。複数の価値観が描く円の重なりあいの是認である。かく申す評者は席上でジェンダー美術史の敵と指弾された。当方の異文化理解の基軸は複数焦点の相互作用、楕円軌道の確保にある。排中律でも無矛盾律でもなく、Ａかつ非Ａを許容する「容中律」の擁護が自己同一性の牢獄からの脱出には不可欠。だが、そんな渡辺≒稲賀見解は、もはや時代の潮流から遅れた謬見なのだろうか。

※明治美術学会編『明治から／明治へ――書き直し近代日本美術』